2014年（平成26年）4月10日　北國新聞　朝刊

北國新聞　第3種郵便物認可

苦悩に寄り添う「臨床宗教師」

寄稿

多様な価値観 受け入れ

被災地や病院、在宅で

谷山 洋三　東北大大学院准教授（金沢市出身）

東日本大震災を機に2012年4月、東北大に実践宗教学寄附講座が開設された。同講座で提唱し、人材養成に取り組む「臨床宗教師」について、金沢市出身の谷山洋三准教授が解説した。

◇　◇

「苦しいときの神頼み」といわれるように、昔から人々は宗教と上手につきあってきた。その苦悩が強くて複雑であるならば、なおさらのこと人には言いにくい。人間関係が希薄になった現代社会では、話を聴いてくれる人を探すのも容易ではないが、かつては周囲の人たちが相談相手になってくれた。その中には宗教者も含まれていただろう。

欧米では、軍隊、警察、消防、刑務所、医療福祉施設、大学などに「チャプレン」と呼ばれる宗教者が働いている。自宅を離れて教会に通えない人たちのために、特別に雇われた神父や牧師が相談を受ける。

私は新潟県長岡市の長岡西病院で仏教チャプレン（ビハーラ僧）として働いたことがある。終末期患者やその家族、そしてスタッフの心のケア（スピリチュアルケア）を担当する僧侶という珍しい仕事だった。カウンセリングと少し違うのは、その方の価値観や信仰心にも触れて、求められれば読経などをするという点である。

◆無宗教にも対応

仏堂がある病棟なので、私自身も仏教色が強いと思っていたが、実際にはクリスチャンや新宗教、そして神道や民間信仰の価値観が強い方もいた。仏教者としての価値観を押しつけるのではなく、相手の価値観を受け入れることが大切で、「受け入れられた」と思えたならば、それだけで気持ちが楽になる、ということを実感した。

東日本大震災後、いくつかの地域で僧侶・神職・牧師などが協力して心のケアの活動を続けてきた。災害時のチャプレンである。2012年4月に東北大学「実践宗教学寄附講座」が開設され、人材養成のためのプログラムが始まった。開設の旗を振った岡部健医師（同年9月27日死去）は、在宅緩和ケアの専門医だった。岡部医師は「チャプレン」というカタカナ語に替えて「臨床宗教師」を提唱し、被災地だけでなく、終末期医療にも宗教者に関わってほしいと願っていた。

臨床宗教師の人材養成プログラムは、講義だけではなく、被災地や病院、在宅ケアの現場での実習もある。受講者はグループワークによって実習内容を振り返り、ケアの技術よりもむしろ自分自身のあり方を見つめる。自分自身の内面を深く見つめることにより、多様な価値観を受け入れられるようになる。

死のように、嫌々ながらも向き合わざるを得ないような苦悩に直面した方々を、宗教者が心の面で支えてくれるのが当たり前の社会になることを願っている。

迎えようとしている。宗教者が社会の一員であるならば、この問題にも応えられる存在になることが求められる。金沢市寺町の日蓮宗妙法寺副住職の出島元寿さん（33）は「医療者と連携しながら、つらい話でも相談できる場を作りたい」と一念発起し、来月から始まる東北大学「実践宗教学寄附講座」の第5回研修に参加する。石川県からは初めての受講者だ。

たにやま ようぞう　1972年、金沢市生まれ。東北大学文学部卒業、東北大学大学院文学研究科博士後期課程修了。仏教看護・ビハーラ学会理事、日本スピリチュアルケア学会評議員、日本死の臨床研究会世話人。専門は「臨床死生学」、仏教福祉学。著書に「仏教とスピリチュアルケア編著」（東方出版）ほか。

僧侶や神職、牧師が共に学び合う臨床宗教師研修のグループワーク＝仙台市の浄土宗運光寺本堂（谷山准教授提供）

北國文化

石川から初参加

日本は超高齢多死社会を迎えようとしている。宗教者が社会の一員であるならば、この問題にも応えられる存在になることが求められる。金沢市寺町の日蓮宗妙法寺副住職の出島元寿さん（33）は「医療者と連携しながら、つらい話でも相談できる場を作りたい」と一念発起し、来月から始まる東北大学「実践宗教学寄附講座」の第5回研修に参加する。石川県からは初めての受講者だ。

27、29日に講演会

ドイツ・フライブルク福音主義単科大のケルスティン・ラマー教授の講演会が27日に金沢市のしいのき迎賓館で「世俗化が進むドイツの諸施設における死と看取りの思想的背景」、29日にかほく市の県立看護大で「グリーフケアの理論と実践―ドイツの病院における魂のケア―」と題して開かれる。いずれも日本語通訳あり。問い合わせは県立看護大の浅見洋研究室＝076（281）8343＝まで。